



Blau Leben JOURNAL.

VOL. 01



世界弱者の日本住宅事情

— なぜ日本の住宅は、世界基準から取り残されているのか



世界弱者の日本住宅事情

— なぜ日本の住宅は、世界基準から取り残されたのか

日本は経済大国であり、技術力の高い国だと語られてきました。

しかし、住宅という分野に限って見たとき、日本は決して「先進国」とは言えません。

むしろ、世界の住宅事情と比べると、日本の住まいは「弱者」と言わざるを得ない状況にあります。

それは貧しさの問題ではありません。選択してこなかった結果です。

— 世界では「当たり前」のことが、日本では非常識

ヨーロッパや北米では、家の中が寒いことは「仕方ないこと」ではありません。

- ・冬でも家全体が一定の温度に保たれている
- ・廊下・トイレ・寝室も同じ温熱環境
- ・家の中で上着を着る必要がない

これらは贅沢ではなく、

人が健康に暮らすための最低条件として考えられています。

一方、日本ではどうでしょうか。

- ・暖房は部屋ごと
- ・廊下や脱衣所は寒いまま
- ・冬は家の中でも防寒着が必要

この状態が、長い間「日本の家はこんなものだ」と受け入れられてきました。



— 日本の住宅は「人が我慢する」ことで成立してきた

日本の住宅は、建物そのものの性能で寒さを防ぐのではなく、住む人が我慢することでバランスを取ってきた背景があります。

- ・寒ければ着込む
- ・移動は最小限にする
- ・冬は活動量が下がる

世界が「建物で人を守る」方向に進む中、日本は「人が環境に合わせる」道を選んできました。

この違いは、単なる設計手法の差ではありません。

住宅に対する思想の差です。

なぜ日本だけが、住宅弱者になったのか

理由は明確です。

- ・夏を優先し、冬を軽視してきた住宅文化
- ・見えない性能より、見える価格や設備を重視した市場
- ・健康を基準にしない住宅政策

その結果、日本では寒くても、危険でも「基準を満たしている」住宅が大量につくられてきました。

- ・世界では、「人の健康を守れない住宅」は問題視される
- ・日本では、「住めていれば問題ない住宅」が許されてきた

この差が、今の日本住宅事情をつくっています。

弱い住宅は、弱い暮らしを生む

寒い家は、単に不快だけではなく、

- ・血圧の乱高下
- ・睡眠の質の低下
- ・活動量の減少
- ・高齢期の健康リスク増大

住環境は、毎日24時間、静かに人の体と人生に影響を与えています。

つまり、住宅性能が弱いということは、暮らしそのものが不利な条件で始まっているということです。

この意味で、日本の住宅は世界の中で「弱い立場」に置かれていると言えます。

それでも、日本の家は変えられる。

重要なのは、日本の住宅が「能力的に劣っている」わけではないということです。

断熱・気密・換気を正しく整えれば、築年数の古い家であっても、世界水準に近づけることは可能です。

わたしたちは実際に、**築60年の住宅を断熱改修し**、新築を超える快適性能を実現してきました。

これは無理難題ではありません。正しい考え方の結果です。



ブラウレーベンが目指すもの

私たちブラウレーベンは、住宅を「我慢する場所」だとは考えていません。

家は、人の健康と尊厳を守るための環境であるべきです。

世界で当たり前の暮らしを、日本でも当たり前にする。

そのために必要なのは、高価な設備ではなく、住まいに対する価値観の転換です。

日本の住宅は、長い間、世界基準から目を背けてきました。

しかし今、その遅れははっきりと形になって表れています。

寒さを我慢する暮らしから、人を守る住環境へ。

日本の住宅が「世界弱者」であり続けるかどうかは、これからの私たちの選択にかかっています。

WORKS

東町の家

数値で見る断熱改修の実力 — 築60年の住宅はここまで変わる



ここまで変わる!断熱改修ビフォーアフター

- ▶ 改修工事: 外張り断熱(壁・基礎)+屋内天井断熱+樹脂サッシ 仮住まいなしで住みながら断熱工事
- ▶ 地域区分: 7地域(宮崎県)
- ▶ 住宅の規模: 木造平屋建 築年数: 60年
- ▶ 工期:
- ▶ 等級: 等級2 → 等級5(誘導基準相当)
- ▶ Ua値(基準値含む):
改修前: 外皮平均熱貫流率3.82W/(m²・K)
基準値: 2.35W/(m²・K)不適合
改修後: 外皮平均熱貫流率0.49W/(m²・K)
基準値: 0.60W/(m²・K)
- ▶ 平均日射熱取得率:
冷房期の平均日射熱取得率: 9.4 → 1.9
暖房期の平均日射熱取得率: 9.4 → 1.5